

## 貨幣による世界の数値化とグローバリズム —会計・金融人類学からの理論的再考—

砂川和範(中央大学)

### 【要旨】

本稿は、グローバリズムを資本や人の移動の拡大としてではなく、**会計・金融的な計算様式が、世界・都市・組織・生活世界を「評価可能で将来配分可能な対象」として再構成していく歴史過程**として再定義する理論的レビュー論文である。従来の都市研究や政治経済学は、金融をグローバリズムの原因あるいは結果として位置づけてきたが、本稿は、金融と会計を、**世界を記述し判断する形式そのもの**として捉える点に特徴がある。

分析にあたっては、貨幣の社会哲学、金融・会計人類学、グローバル・シティ論の再読を横断的に統合し、金融市場や会計基準が現実を反映するのではなく、現実を構成する遂行的装置として作動してきたことを示す。さらに、東京の都市再開発、会計基準の国際化、公共政策評価を事例に、金融化が市場中心的ではなく、**会計・評価・行政を媒介として浸透する「翻訳型」の形態**をとってきたことを実証的に論じる。

その上で本稿は、近年の社会的分断を説明する枠組みとして知られる *グッドハートの Somewhere / Anywhere* 論を再解釈し、この分断を文化や価値観の対立ではなく、**会計・金融的評価インフラへの接続可能性の差異**として位置づける。会計化された世界において、グローバリズムは解放と拘束を同時に生み出す弁証法的過程として現れ、誰の将来が評価され、誰の将来が切り捨てられるのかを日常的な計算を通じて選別している。本稿はこの点を明らかにすることで、グローバリズム批判を反市場的立場からではなく、**評価と将来配分の制度設計を問い直す内在的批判**として再構築する。

### 【キーワード】

貨幣, 会計化, 金融・会計人類学, 数値化/評価, グローバリズム

### 【目次】

- I. 研究目的と背景
- II. 貨幣から会計へ: 価値はいかにして固定され、将来は誰によって配分されるのか
- III. 金融市場は「存在」するのか: 会計・金融人類学からみたグローバリズムの内側
- IV. 「グローバル・シティ」論再訪: 金融の「司令塔」から会計的判断の「結節点」へ
- V. 東京という**翻訳装置**: 会計・評価・再開発を通じた日本型金融化の実証分析
- VI. 会計・金融はいかにして「世界の形式」になったのか: 解放と拘束の同時生成
- VII. 結論と展望: *Somewhere / Anywhere* を生み出す会計的世界編成

## I. 研究目的と背景

グローバリズムは、長らく資本・人・情報の越境的移動の拡大として理解されてきた。とりわけ 1990 年代以降の議論では、金融の自由化と市場統合が、国家の統治能力を相対化し、都市や企業、個人の行為条件を大きく変容させたこと論じられてきた (Harvey 2005; Stiglitz 2002)。しかし、こうした理解は、金融をグローバリズムの「原因」あるいは「結果」として位置づけるにとどまり、**金融や会計それ自体が、どのように世界の見方や判断の仕方を組織してきたのか**という問いを十分に掘り下げてはいない。

本稿が出発点とするのは、貨幣—金融が単なる経済領域の一部ではなく、**世界を記述し、判断し、将来を配分するための形式(form)へと転位してきた**という認識である。会計基準、金融モデル、評価指標、リスク計算といった計算様式は、現実を中立的に反映する道具ではなく、何が価値あるものとして認識され、どのような将来が想定されるのかを事前に規定する装置として作動してきた (Callon 1998; MacKenzie 2006; Espeland and Stevens 2008)。グローバリズムとは、こうした計算様式が世界規模で標準化され、社会的判断の正当な言語として制度化されていく過程として捉え直される必要がある。

この問題意識は、近年の金融・会計人類学の進展と強く結びついている。これらの研究は、金融市場や会計制度を、既存の社会関係を映し出す鏡としてではなく、**社会的現実を構成する遂行的装置**として分析してきた (MacKenzie and Millo 2003; Miller 2001; Muniesa 2014)。この視点に立つと、金融化とは市場取引の拡大ではなく、**評価・計算・説明責任をめぐる実践が、組織や都市、生活世界にまで浸透していく過程**として理解される。

一方、都市研究においては、サスキア・サッセンによるグローバル・シティ論が、金融と都市の関係を捉える理論的基盤を提供してきた (Sassen 2001)。しかし、グローバル・シティ論は、金融を高度サービス産業の一部として把握する傾向が強く、**金融や会計がどのように判断や評価の形式として都市統治に組み込まれているのか**については十分に理論化してこなかった。また、英米型金融市場を暗黙の基準とすることで、東京のようなグローバルかつ非典型的都市の経験を周縁化してきた側面も否めない。

本稿は、この点を批判的に継承しつつ、都市を金融の「立地」や「司令塔」としてではなく、**会計的判断と価値評価が集中・翻訳される結節点**として再定義する。とりわけ東京という都市は、金融市場の中心ではない、にもかかわらず、1990 年代以降の会計基準の国際化、都市再開発、不動産評価、公共政策の数値化を通じて、将来配分の論理が深く制度化されてきた。この経験は、グローバリズムが単一の金融モデルによって進行するのではなく、**会計・評価を媒介とした多様な経路を通じて実装される**ことを示している。

さらに本稿は、近年の社会的・政治的分断を説明する枠組みとして注目を集めてきた Somewhere / Anywhere 論を、この文脈に位置づけ直す。グッドハートの提示したこの対立は、しばしば文化や価値観の違いとして理解されてきたが、本稿はそれを、**会計・金融的評価インフラへの接続可能性の差異**として再解釈する。すなわち、分断の核心にあるのは移動性や態度の違いではなく、誰の将来が評価され、計算され、投資対象として承認されるのかという制度的条件の差異である。

以上を踏まえ、本稿の中心的問いは次のように定式化される。**金融はいつかとして世界を数値化し、都市を統治するに至ったのか**。そして、その過程はなぜ、解放と拘束を同時に生み出し、評価される将来と評価されない将来という新たな分断を生み出してきたのか。本稿は、貨幣の社会哲学、金融・会計人類学、グローバル・シティ論の再読、東京の実証的検討を横断的に統合することで、この問いに理論的に応答する。

本稿の方法論は、理論構築型ナラティブ・レビューである。既存研究を網羅的に整理するのではなく、「**将来の評価と配分**」という一つの問いを軸に、貨幣論、金融・会計人類学、都市研究を接続し直す点に特徴がある。本稿の構成は以下の通りである。II. では、貨幣論と人類学研究を手がかりに、価値と将来がどのように制度的に固定されてきたのかを検討する。III. では、金融・会計人類学の知見を用いて、金融市場と会計が現実を構成する遂行

的装置であることを明らかにする。IV.では、グローバル・シティ論を再読し、都市を判断と翻訳の結節点として再定義する。V.では、東京を事例に、日本型金融化の実証的特徴を分析する。VI.では、これらを統合し、グローバリズムを解放と拘束の同時生成として弁証法的に捉える。最後にVII.では、Somewhere / Anywhere の分断を、会計化された世界における将来配分の問題として位置づけ、グローバリズム批判の新たな射程を提示する。

## II.貨幣から会計へ:価値はいかにして固定され、将来は誰によって配分されるのか

経済学において、貨幣は長らく価値尺度・交換手段・価値貯蔵手段という三機能によって定義されてきた。この理解は、貨幣を経済活動を円滑にする中立的な媒介として把握する点で、分析上の簡潔さをもつ。しかし同時に、それは貨幣が社会に及ぼす拘束力や規範性、さらには時間秩序への介入を十分に説明しない<sup>1</sup>。本章は、貨幣を経済的装置としてではなく、**社会的約束を抽象化し、将来を現在に固定する制度**として再定位することから出発する。

経済学を超えた社会哲学においては、貨幣は早くからこのような制度的・社会的性格をもつものとして捉えられてきた。ジンメルは、貨幣を社会的関係を抽象化し、比較可能性を付与する普遍的形式として位置づけた(Simmel 1900)。ヴェーバーにおいても、貨幣は合理化された経済秩序を支える形式的合理性の中核をなす(Weber 1922)。これらの議論に共通するのは、貨幣が単なる交換の媒介ではなく、**行為を方向づける社会的拘束の形式**であるという認識である<sup>2</sup>。

この視点は、20世紀以降の貨幣論においてさらに展開されてきた。ケインズは、不確実な将来に直面する人間が貨幣を保有する動機に注目し、貨幣を時間と不確実性を管理する制度として捉えた(Keynes 1930)。より近年では、貨幣を制度化された信用関係として捉える議論や、債務を社会的・道徳的制度として理解する議論が展開されている(Ingham 2004; Graeber 2011)。これらの研究は、貨幣が**将来に対する約束を現在において固定する装置**であることを明確にしてきた<sup>3</sup>。

しかし、本稿が強調したいのは、グローバリズムと金融化が進展するなかで、価値と将来の固定が、貨幣それ自体よりも、**会計という実践を通じて行われるようになった**という点である。貨幣が約束を象徴的に表現する制度であるとするれば、会計はその約束を継続的に管理し、履行可能な形へと翻訳する技術である。会計は、過去の取引を記録するだけでなく、将来の行為を方向づけ、責任の所在を事前に規定する(Hopwood 1987; Miller 2001)<sup>4</sup>。

会計研究は、こうした会計の未来志向性を繰り返し指摘してきた。監査や評価の制度は、事後的なチェックではなく、行為主体があらかじめ特定の合理性に従うよう促す統治技術として機能する(Power 1997)。この意味で、会計は中立的な測定装置ではなく、**行為可能性の空間を構造化する規範的装置**である<sup>5</sup>。

<sup>1</sup> 経済学的貨幣論の標準的定義については、一般的教科書の整理として Samuelson (1948) や Mankiw (2016) を参照。ただし本稿は、こうした機能的定義が貨幣の社会的拘束力を十分に捉えない点を問題とする。

<sup>2</sup> ジンメルとヴェーバーに共通する貨幣理解については、Dodd (2014) が包括的に整理している。貨幣を形式的合理性の担い手として捉える点で、両者は現代の会計・金融論と理論的連続性をもつ。

<sup>3</sup> 貨幣を信用・債務の制度として捉える系譜には、Innes (1914)、Knapp (1924)、Ingham (2004)、Graeber (2011) が含まれる。これらの議論は、国家・権力・貨幣の関係を重視する点で共通している。

<sup>4</sup> 会計を過去志向的記録ではなく、将来志向的統治技術として捉える議論の古典として Hopwood (1987) を、より一般化した議論として Miller (2001) を参照。

<sup>5</sup> 説明責任(accountability)が事前統治技術へと転化する過程については、Power (1997, 2004) が「監査社会」論として詳細に分析している。

この点を踏まえると、貨幣・会計・金融は相互に独立した制度ではなく、連続体として理解される必要がある。貨幣が社会的約束を抽象化し、会計がその約束を管理・履行し、金融がそれらを統合して将来の不確実性を評価・配分する。この連続体において、価値はもはや市場取引の瞬間にのみ決定されるのではなく、**継続的な評価と計算のプロセスを通じて生成・安定化される**<sup>6</sup>。

本章で示したこの視点は、次章で検討する金融市場の遂行性、すなわち金融市場が現実を反映するのではなく構成するという金融・会計人類学の主張を理解するための前提をなす。貨幣から会計への転位とは、価値の問題が市場交換から、**計算・評価・説明責任**をめぐる制度的実践へと移行したことを意味するのである。

### III.金融市場は「存在」するのか:会計・金融人類学からみたグローバリズムの内側

#### 3.1 金融を「結果」ではなく「形式」として捉える

金融は長らく、グローバリズムの「帰結」あるいは「推進力」として理解されてきた(Harvey 2005;Stiglitz 2002)。しかし、金融人類学および会計人類学の研究の進展は、この理解を根底から問い直してきた。すなわち、金融市場とは、外部に自律的に存在する実体ではなく、理論・モデル・会計・装置・専門家実践によって遂行(perform)される社会的配置である(Callon 1998;MacKenzie 2006;Muniesa 2014)<sup>7</sup>。

この転換は決定的である。なぜなら、金融が「存在する市場」ではなく「作動し続ける計算秩序」であるならば、グローバリズムとは、単なる資本移動の拡大ではなく、特定の計算様式が世界を記述し、判断し、将来を配分する支配的形式になる過程として理解されるからである。

#### 3.2 金融モデルと会計:世界を「写す」のではなく「作る」

金融・会計人類学の中心的主張の一つは、経済モデルや会計技術は現実を記述する中立的手段ではなく、現実を生成する装置であるという点にある(MacKenzie 2006;Espeland and Stevens 2008)。ブラック＝ショールズ・モデルの歴史的分析が示したように、理論は市場を「説明した」のではなく、市場実践に組み込まれることで、市場そのものの振る舞いを変化させた(MacKenzie and Millo 2003)。

同様に、会計は単なる過去の記録ではない。会計は、将来の責任、期待、リスクを数値として前配分することで、組織や市場における行為可能性の範囲を事前に構造化する(Hopwood 1987;Miller and Power 2013)。この意味で、金融市場とは、価格形成の場である以前に、会計的判断が反復的に下される場である<sup>8</sup>。

#### 3.3 トレーダー研究:金融合理性の文化的・組織的条件

金融人類学および会計人類学のもう一つの重要な貢献は、**金融合理性が純粋に数理的なものではない**ことを、現場研究によって明らかにした点にある。ウォール・ストリートの民族誌研究は、トレーダーの判断が、モデ

<sup>6</sup> 貨幣・会計・金融を連続体として捉える視点は、Miller and Power (2013)の「accounting, organizing, and economizing」という枠組みと直接的に接続される。本稿はこれを都市・グローバリズム分析へと拡張する。

<sup>7</sup> 市場の遂行性概念は、経済学批判というよりも、経済学が社会にどのように「埋め込まれるか」を問う点に特徴がある(Callon 1998;Barry & Slater 2002)。この立場は、ラトゥールの行為体ネットワーク論(Latour 2005)と、フーコーの統治性論(Foucault 2008)の接合点に位置づけられる。

<sup>8</sup> 会計の「未来志向性」については、Miller (2001)、Power (1997)、Hopwood (2009)が体系的に論じている。とりわけ監査社会論は、説明責任(accountability)が事後的評価ではなく、事前的統治技術へと転位している点を強調する(Power 1997;Power 2004)。

ル、感情、組織文化、キャリア制度の複合体として形成されることを示している(Zaloom 2006;Ho 2009;Beunza and Stark 2012)<sup>9</sup>。

Ho(2009)は、米国投資銀行における雇用慣行と株主価値論理が、短期的成果を志向する主体を制度的に生み出していることを描き出した。ここで重要なのは、金融が「不安定化した」のではなく、**不安定性そのものが合理性として正当化される文化が形成された**という点である(Ho 2009;Godechot 2016)。

### 3.4 デリバティブと時間:未来をめぐる政治

デリバティブはしばしば高度で抽象的な金融商品として説明されるが、人類学的視点からは、むしろ時間を操作し、将来を現在に折り畳む政治的技術として理解される(MacKenzie 2018;Lepinay 2011)。リスク管理とは、不確実性を除去することではなく、不確実な未来を比較可能な数値へと変換し、意思決定を可能にすることである(Power et al. 2009)<sup>10</sup>。

この点で、金融市場は「将来を予測する場」ではない。金融市場とは、どの将来が重要で、どの将来が切り捨てられるかを決定する装置である(Appadurai 2016;Bear 2015)。グローバリズムは、この将来配分の技術が国境を越えて標準化される過程として理解できる。

### 3.5 人類学の視点:グローバリズムの内側から見た金融

以上を踏まえると、金融はグローバリズムの「結果」でも「原因」でもない。金融とは、世界を計算可能な対象として記述し、判断し、将来を配分する形式そのものである。この形式が、会計基準、金融モデル、組織文化を通じて安定的に再生産されるとき、グローバリズムは「外部から押し寄せる力」ではなく、日常的に遂行される統治様式として現れる。この視点は、次章で扱う貨幣・会計の社会哲学的基礎を通じて、より根源的に位置づけられる。

## IV.「グローバル・シティ」論再訪:金融の「司令塔」から会計的判断の「結節点」へ

### 4.1 サッセンは何を可視化し、何を見落としたのか

サッセンのグローバル・シティ論は、都市研究において決定的な転換をもたらした(Sassen 2001)。彼女は、社会学・政治経済学・都市研究を横断しつつ、1970s 末以降の世界経済の新しい動向を描こうとした「新しい国際分業(new international division of labor, NIDL)」論以後の世界経済再編を、国家間の南北問題としてではなく、世界都市の形成と、その内部における分断と格差の再編として捉え直した研究者である(Froebel et al.,1980)。

NIDL が当初、製造業の国際的再配置や労働集約産業の南への移転といった国家間格差を主要な分析対象としてきたのに対し、サッセンは、その帰結として生じた金融・高度専門サービスの集積が、特定の都市において経済的・政治的判断の中核機能を形成する点に注目した。こうして彼女は、グローバル経済がもたらす不平等が、もはや国民国家間の問題にとどまらず、**世界都市の内部において、労働市場の二極化、居住空間の分断、社会的排除として再編される過程を理論化した**のである。その中で彼女は、ニューヨーク、ロンドン、東京といった3都市に着目し、それらをグローバル経済の中核的機能が集積する「司令塔」として位置づけ、金融・専門サービス業の集中が都市内部の分極化を生み出すことを明らかにした。

<sup>9</sup> トレーダー研究には、シカゴ商品取引所を扱った Zaloom(2006)、パリ金融エリートを分析した Godechot(2016)、裁定取引の実践を追った Beunza & Stark(2012)などがある。これらは、合理性を「個人属性」ではなく「組織化された実践」として捉える点で共通している。

<sup>10</sup> 金融と時間の関係については、Keynes(1936)以来の不確実性論に加え、Luhmann(1995)の時間論、Appadurai(2016)の言語行為論的金融論が参照可能である。人類学的には、Bear(2015)が債務と時間感覚の関係を精緻に論じている。

しかし同時に、この理論は批判にも晒されてきた<sup>11</sup>。すなわち、

- ① 都市内部の多様な実践を過度に単純化していること、
- ② グローバル・シティというモデルが英米中心的事であること、
- ③ 金融を「立地する産業」として捉え、**金融そのものの作動様式**を十分に理論化していないこと

である (Peck 2010; Roy 2009; Derickson 2015)。本章の目的は、これらの批判を単に列挙することではない。むしろ、金融・会計人類学の知見を用いて、サッセンの理論を内在的に再構成することである。そうすることで、グローバル・シティを「金融の集積地」ではなく、会計的判断と価値評価が集中・翻訳される結節点として捉え直すことが可能になる。

#### 4.2 グローバル・シティ論の核心:司令塔機能とは何か

サッセンの初期理論において、グローバル・シティの本質は、金融や専門サービスが「集積」すること自体ではなく、それらが分散した経済活動を統合・管理・調整する能力にあった (Sassen 2001)。この司令塔機能は、企業本社、法律事務所、会計事務所、投資銀行といった組織の集合体として理解された。

この点を金融・会計人類学の視点から読み替えるならば、グローバル・シティとは、判断 (decision) と評価 (valuation) が制度化される場所である。すなわち、企業価値、リスク、信用、将来収益といった抽象的対象が、会計・法・金融の言語によって可視化され、意思決定可能な形に翻訳される地点である (Miller and Power 2013; Muniesa 2014)<sup>12</sup>。

#### 4.3 近年のサッセン:排出・抽出・領域の再編

サッセン自身も近年、グローバル・シティ論を大きく更新している。『Expulsions』において彼女は、金融とグローバル化が、単なる不平等の拡大ではなく、人びとや活動を制度の外部へと「排出」するプロセスを生み出していると論じた (Sassen 2014)<sup>13</sup>。

ここで重要なのは、排出が「失敗」や「例外」ではなく、高度に合理化された制度的判断の結果として生じている点である。住宅ローン、信用評価、財政規律、再開発計画といった会計・金融的判断は、ある主体を「採算が取れない」「リスクが高い」と評価することで、制度的に不可視化・排除する (Aalbers 2016; Christophers 2015)。

この議論は、第2章で検討した金融・会計人類学の知見と強く響き合う。すなわち、排出とは暴力的例外ではなく、計算に基づく平常的判断の累積的帰結なのである。

#### 4.4 グローバル・シティ批判の再定位:多様性か、形式か

グローバル・シティ論への代表的批判は、「都市の多様性を捨象している」というものであった (Robinson 2006; Roy 2009)。しかし本稿は、この批判がしばしば、都市の差異を文化や発展段階の違いとして理解する方向に傾いてきた点に注意を促したい。

<sup>11</sup> グローバル・シティ論の批判的検討については、Brenner and Keil (2006)、Robinson (2006)、Roy (2009)が代表的である。これらは都市の多様性や南の都市経験を強調する。

<sup>12</sup> 「評価 (valuation)」を社会的実践として捉える研究には、Muniesa et al. (2007)、Espeland and Stevens (2008)、Fourcade (2011)がある。これらは価格形成を社会的・政治的過程として捉える。

<sup>13</sup> 排除・排出を会計的判断の結果として捉える視点は、Lazzarato (2012)の債務論、Davies (2014)の評価社会論とも接続可能である。

金融・会計人類学の視点からすれば、問題は都市の「多様性」それ自体ではなく、どのような計算様式が、どのように都市に実装されているかである。つまり、グローバル・シティ論の射程は、特定の都市類型を一般化することではなく、評価・判断・説明責任が集中する形式的条件を明らかにする点にある<sup>14</sup>。

#### 4.5 東京の位置づけ:司令塔なきグローバル・シティ

この再解釈を踏まえると、東京は典型的なグローバル・シティではない。東京には、ニューヨークやロンドンのような金融司令塔機能は限定的にしか存在しない。しかしそれは、東京が周縁的であることを意味しない。

むしろ東京は、グローバルに標準化された会計・評価・統治の形式を、国家・企業・都市計画へと翻訳・調整する結節点として機能してきた(Aoki 2001; Whittaker 2009; Sorensen 2004)。この点で東京は、「司令塔型」ではなく、翻訳型グローバル・シティと位置づけることができる<sup>15</sup>。

ここで金融は、市場取引として前景化するのではなく、会計基準、再開発評価、公共事業の数値化といった形で、静かに都市統治を貫通している(Power 1997; Miller 2001)。

#### 4.6 サッセンを超えて、サッセンを使う

本章では、サッセンのグローバル・シティ論を、金融・会計人類学の視点から再読した。その結果、グローバル・シティとは、金融が「集積」する場所ではなく、会計的判断と価値評価が集中・翻訳される制度的結節点として理解されることが明らかになった。

この再定位によって、サッセン理論は、東京のような「非典型的」都市を説明するための理論的資源として再生される。次章では、この理解を踏まえ、グローバリズムを解放と拘束が同時生成される弁証法的過程として統合的に検討する。

### V. 東京という翻訳装置: 会計・評価・再開発を通じた日本型金融化の事例研究

#### 5.1 問題設定: 東京はなぜ「グローバル・シティ」に見えにくいのか

東京はしばしば、ロンドンやニューヨークと比較して、金融市場の国際性や投機性が弱く、都市として描かれてきた(Sassen 2001; Z/Yen Group 2019)。実際、日本の金融システムは長らく銀行中心であり、株主価値最大化や短期的投機が支配的であったとは言いがたい(Aoki 2001; Dore 2008)。この点から、東京は「金融化の遅れた都市」と評価されることが多かった<sup>16</sup>。

しかし本稿は、この理解自身が、金融化を「市場取引」や「投機活動」に限定して捉える前提に依拠していると論じる。金融・会計人類学および会計研究の視点から見れば、東京は金融化が弱かったのではなく、会計・評価・行政を媒介として異なる様式で金融化を吸収してきた都市である。

#### 5.2 会計基準の国際化と企業統治の再編

<sup>14</sup> 「普通の都市」論(ordinary cities)は、都市の多様性を回復する試みとして重要だが(Robinson 2006)、計算様式の共通性という観点から再検討する余地がある。

<sup>15</sup> 東京を「翻訳型都市」として捉える視点は、Latour(2005)の翻訳概念、Kurumäki et al.(2016)の会計化論と接続される。

<sup>16</sup> 日本の金融化を「不完全」あるいは「例外」と捉える議論には、Engelen et al.(2011)やHardie(2012)がある。一方で、金融化の多様性を強調する立場として、Aalbers(2016)やChristophers(2015)が参照される。

東京における金融化を理解するうえで重要なのは、株式市場の活性化よりも、会計基準とガバナンスの変容である<sup>17</sup>。1990年代後半以降、日本では連結会計の導入、時価会計の拡張、国際会計基準(IFRS)への接近が進行した(Whittaker 2009;Karan & Colignon 2010)。

これらの改革は、企業行動を直接的に市場化したというよりも、企業の将来を評価・説明する言語を変化させた点に意義がある(Hopwood 2009;Miller & Power 2013)。とりわけ、資産評価や減損会計は、企業活動を「継続的に測定・説明される対象」として再構成し、経営判断を会計的合理性へと結びつけた(Power 2004;Espeland & Stevens 2008)。

### 5.3 不動産評価と都市再開発:金融化の「静かな中枢」

東京における金融化が最も顕著に現れるのは、都市再開発と不動産評価の領域である。1990年代以降の大規模再開発(六本木ヒルズ、丸の内再編、日本橋再開発など)は、単なる都市景観の更新ではなく、不動産価値を将来収益として再構成する会計的プロジェクトであった(Sorensen 2004;Jacobs 2011)<sup>18</sup>。

これらの再開発において重要なのは、土地や建物が「使われる空間」ではなく、評価モデルに基づいて将来キャッシュフローを生む資産として扱われた点である(Aalbers 2016;Christophers 2018)。ここでは金融化は投機的取引としてではなく、行政・企業・金融機関を横断する評価実践として進化した。

### 5.4 行政・公共部門における計算様式の浸透

東京の特異性は、金融的計算が民間部門にとどまらず、行政・公共政策に深く浸透している点にある。公共事業評価、都市計画、PPP/PFIの導入は、政策判断を費用便益分析や数値指標に依存させることで、政治的選択を技術的判断として再記述してきた(Hood 1991;Power 1997)。

この過程において、行政は市場化されたのではなく、会計化(accountingization)されたと理解すべきである(Miller 2001;Kurummäki et al. 2016)。東京は、金融市場の前線ではなく、計算に基づく統治が制度化される実験場として機能してきた<sup>19</sup>。

### 5.5 東京は「グローバル・シティ」ではなく「翻訳型都市」である

以上を踏まえると、東京はサッセン的意味での「金融司令塔」としてのグローバル・シティではない。しかしそれは、東京が周縁的であることを意味しない。むしろ東京は、グローバルに標準化された会計・金融的計算様式を、国家・企業・都市計画へと翻訳・調整する中枢として機能してきた<sup>20</sup>。

この意味で東京は、金融市場の中心というよりも金融的世界観が日常的統治へと沈殿する地点である。金融化はここで、可視的な投機としてではなく、静かな評価実践の連鎖として進化した。

### 5.6 東京から見たグローバリズムの位相

東京の経験が示すのは、グローバリズムが単一の金融モデルによって進行するわけではないという点である。金融・会計的計算様式は、各国・各都市において異なる制度的経路を通じて実装される。東京は、その中でも、市場化よりも会計化を通じて世界と接続した都市として位置づけられる。

<sup>17</sup> 日本における会計改革の政治性については、Saito (2003)、Hirano (2019)が詳細に論じている。これらは、会計基準が中立的技術ではなく、統治技術であることを示している。

<sup>18</sup> 日本の不動産金融化については、Shatkin (2017)、Allinson (2019)が比較都市研究の文脈で論じている。また、再開発を「会計的翻訳」として捉える視点には、Miller and O'Leary (2007)と接続可能である。

<sup>19</sup> 日本の公共部門改革と会計の関係については、Yamamoto (2003)、Uesugi (2018)、Kurummäki et al. (2016)が参照可能である。

<sup>20</sup> 東京を「翻訳型都市」として捉える視点には、Latour (2005)の翻訳概念、および Sassen (2014)の「領域・権威・権利」再編論と理論的に接続される。

この視点は、次章で扱うグローバリズムの弁証法的理解——解放と拘束の同時生成——を、具体的な都市経験に根ざして再検討するための基盤を提供する。

## VI. 会計・金融はいかにして「世界の形式」になったのか: 解放と拘束の同時生成

本稿がこれまで検討してきた貨幣論、金融・会計人類学、グローバル・シティ論、そして東京の事例研究は、いずれも一つの共通した方向を指し示している。それは、金融や会計がもはや「経済の一部」や「市場の技術」にとどまらず、**世界を理解し、判断し、将来を配分するための形式そのものへと転位した**という点である<sup>21</sup>。グローバリズムとは、資本移動の拡大や市場統合の進展ではなく、会計・金融的計算様式が、社会的現実を記述する支配的言語として制度化されていく過程として捉え直されなければならない。

この転位を理解するためには、**貨幣・会計・金融を相互に切り離された制度としてではなく、連続体として把握する視角**が必要である<sup>22</sup>。貨幣が社会的約束を抽象化し、時間的に固定する制度であるとするれば、会計はその約束を組織的に管理し、説明責任の形式として安定化させる技術である。さらに金融は、これらを統合し、将来の不確実性を評価・配分する装置として作動する。この連続体において、価値は市場取引の瞬間にのみ決定されるのではなく、**継続的な評価と計算のプロセスを通じて生成・維持**される。

金融・会計人類学の諸研究が明らかにしてきたのは、こうした評価と計算が、現実を「反映」する中立的手段ではなく、現実そのものを「構成」するという点である<sup>23</sup>。経済モデル、会計基準、リスク指標は、世界を写し取るための道具ではなく、行為の可能性を事前に規定し、意思決定の枠組みを形成する装置として機能する。この意味で、グローバリズムとは、特定の計算様式が世界に対する正当な記述として承認され、その記述に基づく判断が反復的に遂行される状態にほかならない<sup>23</sup>。

しかし、この過程は一方的な支配や抑圧としてのみ理解されるべきではない。会計・金融的計算様式は、確かに世界を可視化し、比較可能性を高め、異なる主体や場所を接続してきた。この点において、グローバリズムは、行為主体に新たな自由と可能性を与える解放的契機を内包している<sup>24</sup>。企業、都市、個人は、計算を通じて自らの位置を把握し、将来を構想することが可能になった。

同時にしかし、計算様式が支配的になるにつれて、**評価されないもの、計算に乗らないものは、存在しないものとして扱われる**傾向が強まる。将来は数値として前もって固定され、評価不能な活動や生活様式は、合理的判断の名のもとに周縁化される。この排除は、例外的な失敗や恣意的暴力としてではなく、**平常的で日常的な計算**

<sup>21</sup> 本章で用いる「世界の形式(form of the world)」という表現は、会計・金融を単なる経済技術ではなく、現実を把握し判断する記述=存在論的枠組みとして捉える立場を指す。これは、経済を社会に「埋め込まれたもの」と捉える古典的経済社会学(Polanyi 1944)を超え、経済的計算そのものが社会秩序を構成するというSTS的転回に基づく(Callon 1998; Latour 2005; Miller 2001)。

<sup>22</sup> 貨幣を社会的約束の抽象化として捉える視角は、Simmel(1900)やWeber(1922)に遡ることができる。これを現代的に再構成したのが、貨幣を制度化された信用関係として理解するIngham(2004)や、債務を社会的・道徳的制度として捉えるGraeber(2011)である。本稿は、これらの議論を踏まえつつ、貨幣的約束が会計を通じて管理・履行され、金融を通じて将来配分へと接続される点を強調する(Hopwood 1987; Power 1997; Miller and Power 2013)。

<sup>23</sup> 会計は過去の取引を記録する装置として理解されがちであるが、会計研究では早くから、会計が将来の行為を方向づける統治技術であることが指摘されてきた(Hopwood 1987; Miller 2001)。監査社会論が示すように、説明責任(accountability)は事後の評価ではなく、事前的に行為を拘束する規範として作動する(Power 1997; Power 2004)。

<sup>24</sup> 市場の遂行性という概念は、経済理論が市場を「説明」するだけでなく、市場実践に組み込まれることで現実を「構成」という洞察に基づく(Callon 1998; MacKenzie 2006)。ブラック=ショールズ=モデルをめぐる研究は、この点を実証的に示した代表例である(MacKenzie and Millo 2003)。こうした議論は、数量化や指標が社会的現実を再編する過程を扱う計量社会学とも接続される(Espeland and Stevens 2008)。

判断の累積として生じる<sup>25</sup>。ここにおいて、グローバリズムは自由と拘束を同時に生み出す制度化された矛盾として理解される。

この矛盾を理論的に把握するためには、単純な「金融化批判」や「新自由主義批判」では不十分である。必要なのは、会計・金融がいかんして世界の形式となり、その形式がどのような可能性と限界を同時に生み出しているのかを、**内在的に**分析する視点である。この意味で、本稿が採用する弁証法的理解とは、矛盾の最終的解消を志向するものではなく、矛盾が制度として固定化され、日常的に再生産される過程を捉えることにある<sup>26</sup>。

都市は、この弁証法が最も濃縮された形で現れる場である<sup>27</sup>。グローバル・シティ論が示したように、都市は単なる経済活動の集積地ではなく、判断・評価・翻訳が集中する結節点である。この点を会計・金融の観点から再解釈するならば、都市とは、将来配分をめぐる計算が最も高密度に交差する社会的実験場である<sup>28</sup>。東京の事例が示したように、金融市場の中心でなくとも、会計基準、再開発評価、公共政策の数値化を通じて、計算様式は深く都市の制度的運営や判断過程に深く浸透しうる。

以上を踏まえると、グローバリズムの核心とは、世界が市場化されたことではなく、**世界が評価可能な対象として再構成されたこと**にある。会計・金融的計算様式は、行為主体に新たな自由を与える一方で、その自由を特定の形式に従う限りにおいてのみ許容する。この条件付きの自由こそが、次章で論じる *Somewhere / Anywhere* の分断を生み出す制度的基盤である<sup>29</sup>。すなわち、その分断は文化や価値観の対立ではなく、将来が評価されるか否かという制度的条件の差異として理解されるべきなのである<sup>30</sup>。

## VII. 結論と展望: *Somewhere / Anywhere* を生み出す会計的世界編成

グローバリズムをめぐる近年の政治的・社会的分断は、しばしば文化的対立や価値観の衝突として語られてきた。その代表例が、グッドハートによる *Somewhere / Anywhere* 論である (Goodhart 2017)。この議論は、移動可能

<sup>25</sup> 市場の遂行性という概念は、経済理論が市場を「説明」するだけでなく、市場実践に組み込まれることで現実を「構成」という洞察に基づく (Callon 1998; MacKenzie 2006)。ブラック＝ショールズ＝モデルをめぐる研究は、この点を実証的に示した代表例である (MacKenzie and Millo 2003)。こうした議論は、数値化や指標が社会的現実を再編する過程を扱う計量社会学とも接続される (Espeland and Stevens 2008)。

<sup>26</sup> 本章で用いる「評価」という概念は、価格形成に限定されない広義のものである。評価とは、対象を比較可能にし、優先順位を付し、意思決定可能な形に翻訳する一連の社会的実践を指す (Muniesa et al. 2007; Fourcade 2011)。この観点からは、会計基準、信用スコア、ランキングはいずれも評価装置として理解される (Fourcade and Healy 2017)。

<sup>27</sup> 都市は、会計・金融・評価が最も高密度に交差する場である。グローバル・シティ論はこの点を「司令塔」という形で捉えたが (Sassen 2001)、本稿はこれを判断と翻訳の結節点として再定義する (Miller and Power 2013)。都市は、グローバリズムの矛盾が可視化される社会的実験場である。

また、本章で用いる弁証法は、矛盾の最終的解消を想定するヘーゲル的総合ではない。むしろ、矛盾が制度として固定化され、日常的に再生産される過程を捉えるという点で、アドルノの否定弁証法に近い (Adorno 1966)。同様の立場は、資本主義の内的矛盾を分析する Boltanski and Chiapello (2005) や Fraser (2013) にも見られる。

<sup>28</sup> 本稿は会計・金融を批判的に検討するが、それらが単なる抑圧装置であるとは考えない。計算様式は、確かに世界を可視化し、比較可能性を高め、新たな接続や協調を可能にしてきた (Callon 1998; MacKenzie 2006)。この点で、本稿は「反金融主義」ではなく、内在的批判の立場をとる。

<sup>29</sup> 排除や周縁化を、制度の失敗や例外として理解する立場に対し、本稿はそれらを計算が正しく遂行された結果として捉える (Sassen 2014)。住宅ローン審査、財政規律、再開発評価において生じる排除は、暴力的例外ではなく、合理的判断の累積である (Aalbers 2016; Christophers 2018)。この点は、債務を通じた統治を論じる Lazzarato (2012) とも響き合う。

<sup>30</sup> 本章で示した「評価される将来/評価されない将来」という区別は、次章で扱う *Somewhere / Anywhere* 論の理論的基盤である。ここでの分断は文化的対立ではなく、将来が計算・評価の枠組みに接続されるか否かという制度的条件の差異として理解されるべきである (Goodhart 2017; Fourcade and Healy 2017; Davies 2014)。

で高学歴な「Anywhere」と、場所に根ざした「Somewhere」という対照的な主体像を通じて、ポピュリズムや反グローバリズムの感情構造を巧みに捉えている。しかし、この対立を文化やアイデンティティの差異として理解する限り、なぜこの分断がこれほどまでに持続的かつ構造的であるのかを十分に説明することはできない。

本稿は、この Somewhere / Anywhere の分断を、文化的対立ではなく、**会計・金融的インフラへの接続可能性の差異**として再定式化する。すなわち、グローバリズムとは、世界を移動可能にした過程であると同時に、会計・金融的な計算様式によって、誰の将来が評価され、誰の将来が切り捨てられるのかを制度的に選別してきた過程でもあった。この観点から見ると、Somewhere と Anywhere の違いは、価値観や態度以前に、将来が「**評価可能な対象**」として取り扱われうるか否かにおいて生じている。

Anywhere 的主体とは、単に国境や都市を越えて移動できる個人ではない。より正確には、教育歴、職業経歴、信用履歴、資産状況といった要素が、会計的・金融的言語によって可視化され、比較可能な指標として処理される主体である(Fourcade 2011; Fourcade & Healy 2017)。金融化した社会において、信用スコア、パフォーマンス指標、ランキングは、将来の可能性を現在において数値として前倒しで評価する装置として機能する(Espeland & Stevens 2008; Davies 2014)。Anywhere 的主体は、こうした評価装置に容易に接続できるがゆえに、住宅取得、雇用機会、移動の自由において、将来を「前借り」することが可能となる。

これに対して Somewhere 的主体とは、必ずしも移動を拒否する人々ではない。むしろ、彼らは自らの生活や労働が、会計・金融的評価の枠組みにうまく接続されない主体である。非正規雇用、地方居住、低資産、断片的な職歴といった属性は、個々人の選好や努力の結果というよりも、**評価装置の設計が特定の将来像を前提としていることの帰結**である(Sassen 2014; Lazzarato 2012)。重要なのは、この排除が例外的な失敗としてではなく、住宅ローン審査、再開発評価、公共投資判断といった日常の合理的かつ合理的な計算の積み重ねとして生じている点である(Aalbers 2016; Christophers 2018)。

このように理解するならば、グローバリズムは単純な支配装置ではない。会計・金融的計算様式は、確かに世界を可視化し、比較可能性を高め、新たな接続や機会を生み出してきた(Callon 1998; MacKenzie 2006)。しかし同時に、それらは将来を数値に固定し、評価不能なものを周縁化し、帰属の基盤を不安定化してきた。この**解放と拘束の同時生成**こそが、グローバリズムの弁証法的本質である(Boltanski & Chiapello 2005; Fraser 2013)。

この弁証法は、東京という都市において特に明瞭に観察される。東京は、ニューヨークやロンドンのような金融司令塔ではないが、会計基準、都市再開発、公共政策評価を通じて、将来配分の論理が都市全体に深く浸透してきた(Whittaker 2009; Sorensen 2004)。その結果、東京は、Anywhere 的主体にとっては将来を最適化できる都市である一方で、Somewhere 的主体にとっては、評価から静かに排除される都市として二重化している。この分断は文化的対立として可視化されにくいだが、会計・評価・再開発の制度設計の中に確実に埋め込まれている。

以上を踏まえると、グローバリズムへの批判とは、それを拒否することでも、ノスタルジックに国民国家へ回帰することでもない。むしろ問われるべきなのは、**どの将来が、誰によって、どの基準で評価され、投資対象として承認されているのか**という点である。会計・金融的計算様式が世界を記述する支配的言語となった現在において、批判とは、その言語の前提条件を可視化し、他なる将来の可能性を構想する実践に他ならない。

## 【参考文献】

- Aalbers, M. B. (2016). *The financialization of housing*. Routledge.
- Aoki, M. (2001). *Toward a comparative institutional analysis*. MIT Press.
- Appadurai, A. (2016). *Banking on words: The failure of language in the age of derivative finance*. University of Chicago Press.

- Bear, L. (2015). *Navigating austerity: Currents of debt along a South Asian river*. Stanford University Press.
- Beunza, D., & Stark, D. (2012). From dissonance to resonance: Cognitive interdependence in quantitative finance. *Economy and Society*, 41(3), 383–417.
- Boltanski, L., & Chiapello, È. (2005). *The new spirit of capitalism*. Verso.
- Callon, M. (1998). *The laws of the markets*. Blackwell.
- Christophers, B. (2015). The limits to financialization. *Dialogues in Human Geography*, 5(2), 183–200.
- Christophers, B. (2018). *The new enclosure: The appropriation of public land in neoliberal Britain*. Verso.
- Davies, W. (2014). *The limits of neoliberalism: Authority, sovereignty and the logic of competition*. Sage.
- Dore, R. (2008). Financialization of the Japanese economy. *Socio-Economic Review*, 6(4), 587–615.
- Espeland, W. N., & Stevens, M. L. (2008). A sociology of quantification. *European Journal of Sociology*, 49(3), 401–436.
- Fourcade, M. (2011). Cents and sensibility: Economic valuation and the nature of “nature.” *American Journal of Sociology*, 116(6), 1721–1777.
- Fourcade, M., & Healy, K. (2017). Seeing like a market. *Socio-Economic Review*, 15(1), 9–29.
- Fraser, N. (2013). *Fortunes of feminism: From state-managed capitalism to neoliberal crisis*. Verso.
- Froebel, F., Heinrichs, J., & Kreye, O. (1980). *The new international division of labour: Structural unemployment in industrialised countries and industrialisation in developing countries*. Cambridge University Press.
- Godechot, O. (2016). *Wages of finance: Investment bankers, top managers, and the making of a financial elite*. Routledge.
- Goodhart, D. (2017). *The road to somewhere: The populist revolt and the future of politics*. Penguin.
- Graeber, D. (2011). *Debt: The first 5,000 years*. Melville House.
- Harvey, D. (2005). *A brief history of neoliberalism*. Oxford University Press.
- Ho, K. (2009). *Liquidated: An ethnography of Wall Street*. Duke University Press.
- Hopwood, A. G. (1987). The archaeology of accounting systems. *Accounting, Organizations and Society*, 12(3), 207–234.
- Hopwood, A. G. (2009). Accounting and the environment. *Accounting, Organizations and Society*, 34(3–4), 433–439.
- Ingham, G. (2004). *The nature of money*. Polity Press.
- Keynes, J. M. (1930). *A treatise on money*. Macmillan.
- Keynes, J. M. (1936). *The general theory of employment, interest and money*. Macmillan.
- Kurunmäki, L., Miller, P., & O’Leary, T. (2016). Accounting and hybridization. *Accounting, Organizations and Society*, 49, 1–13.
- Lazzarato, M. (2012). *The making of the indebted man*. Semiotext(e).
- Lepinay, V. (2011). *Codes of finance: Engineering derivatives in a global bank*. Princeton University Press.
- MacKenzie, D. (2006). *An engine, not a camera: How financial models shape markets*. MIT Press.
- MacKenzie, D. (2018). *Material markets: How economic agents are constructed*. Oxford University Press.
- MacKenzie, D., & Millo, Y. (2003). Constructing a market, performing theory. *American Journal of Sociology*, 109(1), 107–145.
- Miller, P. (2001). Governing by numbers. *Accounting, Organizations and Society*, 26(4–5), 379–396.
- Miller, P., & Power, M. (2013). Accounting, organizing, and economizing. *Accounting, Organizations and Society*, 38(4), 227–247.
- Muniesa, F. (2014). *The provoked economy: Economic reality and the performative turn*. Routledge.

- Power, M. (1997). *The audit society*. Oxford University Press.
- Power, M. (2004). Counting, control and calculation. *Human Relations*, 57(6), 765–783.
- Robinson, J. (2006). *Ordinary cities: Between modernity and development*. Routledge.
- Roy, A. (2009). Why India cannot plan its cities. *Planning Theory*, 8(1), 76–87.
- Sassen, S. (2001). *The global city: New York, London, Tokyo* (2nd ed.). Princeton University Press.
- Sassen, S. (2014). *Expulsions: Brutality and complexity in the global economy*. Harvard University Press.
- Sorensen, A. (2004). *The making of urban Japan: Cities and planning from Edo to the twenty-first century*. Routledge.
- Stiglitz, J. E. (2002). *Globalization and its discontents*. Norton.
- Whittaker, D. H. (2009). *Corporate governance in Japan*. Oxford University Press.
- Zaloom, C. (2006). *Out of the pits: Traders and technology from Chicago to London*. University of Chicago Press.